

Title	ラインホールド・ニーバーと日本：〈冷静を求める祈り〉の受容について
Author(s)	松本, 周
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 6-8
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2348
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ラインホルド・ニーバーと日本

セレニティー・プレイヤー — 〈冷静を求める祈り〉の受容について—

松本 周

1. はじめに

神よ、
変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、
それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、
変えることのできるものと、変えることのでき
ないものとを、
識別する知恵を与えたまえ。

(大木英夫訳)

1967年に『中央公論』誌上で、大木英夫氏により紹介されたニーバーの祈りは、現在に至るまで日本の多方面で人々に共感されてきた。筆者の知る限りにおいても、日野原重明氏（聖路加国際病院元理事長）の著作に引用され、また阿部志郎氏（横須賀基督教社会館会長）はニューヨーク・ユニオン神学大学院へ留学してニーバーと直接の面識を得たこともあり、講演等でしばしばこの祈りに言及する。さらには故速水優氏（日本銀行元総裁）の愛唱の祈りであった事実も良く知られている。付言すれば、この祈りの作者やテキストについては、インターネット時代の情報氾濫も関係して、時おり混乱が見受けられるが、高橋義文氏の論考はそれらについて正確な見解を提示している（高橋2004）。

2. キリスト教現実主義(Christian realism)

渡辺和子氏（ノートルダム清心女子大学元学長）は著作の中でこの祈りを引用しつつ、次のように述べている。「私たちはともすると、イフ・オンリー (if only) の生活をしがちになる。もし

家庭が裕福でありさえしたら、こんな苦労はしないのに。もし〇〇大学に合格さえしていたら、毎日の生活は充実していただろうに。もし……もし……と願望は果てもなく続いてゆく。しかし、現実には、現実以外の何ものでもなく、また、人間の成長は、現実の中でしか行われぬのだ。」「ラインホルド・ニーバーのこの祈りを、今日の私の祈りとして生きたいと思う。私たちには、現実を見つめる醒めた目と、その現実と接する温かい心が必要なのだ。」（渡辺1992）平易な言葉遣いでありながら、祈りの言葉の背後に拡がるニーバー思想が明確に提示されている。

それはニーバーの思惟姿勢としての〈キリスト教現実主義〉にほかならない。先に述べた『中央公論』での大木論文も、この点に関わっていた。そこでは思想の政策への関与を巡る二つの立場、〈現実主義〉と〈理想主義〉の相克が論じられた。現実重視のあまり結果的に現状追認に陥る現実主義と、高次の理想を掲げるものの現実離れの空論に過ぎなくなる理想主義と、いずれも政策実現においては難がある。つまり現実肯定の現実主義と現実否定の理想主義とは両者とも、現在の現実を新たな将来的現実へと形成する力に乏しい。

そこで〈キリスト教現実主義〉が要請されるのだが、それはニーバー自身が「歴史を支える神の力は、人間の最高の努力をもってしても不完全さに終るにちがいないものを完全なものとする事が出来るのであり、また最も純粋な人間の志においてさえもあらわれるところの墮落を清める事が出来るというキリスト教信仰の望みは、我々が歴史的事業を勤勉に成就してゆく上に必要欠くべからざるものである」（Niebuhr1944）と述べているように、神的摂理への信頼に裏打ちされた思想である。

ニーバーはキリスト教現実主義の視点から「人

類の究極の可能性でもあり、また不可能性でもある」世界共同体の建設を提唱した。高橋論文で確認されているようにこの祈りは1943年の作、すなわち第二次世界大戦下という歴史的コンテキストとの関わりにおいて理解されるべきテキストである。この点も、ニーバーのキリスト教現実主義とこの祈りの関係を示唆している。

本題から少々それるかもしれないが、ニーバーの名は昨年、アメリカ合衆国のバラク・オバマ大統領が語ったことで、再び注目された。そのオバマ氏の「核兵器なき世界」提唱が日本では〈理想主義〉と受け止められるが、むしろニーバー的〈キリスト教現実主義〉がそこに表出しているといえよう。

また先に、社会的に幅広く活躍する方々のニーバー受容に触れた。諸氏は共通してキリスト者であり、各々の信仰的実存との関係から、キリスト教現実主義の視点に立ってニーバーの祈りを理解している。

3. 祈りの脱キリスト教化？

ところでニーバーの祈りは、ある意味では意外にも、キリスト教共同体と離れた所で受け容れられている。精神科医の斎藤学氏は、セルフヘルプ（自助）運動を「魂の家族」と呼び、そこでこの祈りが広く用いられていることを記す。（但し作者について、推測による全く違う名が挙げられている。）斎藤氏の解説によれば、「魂の家族」における「神」とは、特定の既存宗教のドグマを離れ、「グループの中に姿を現す愛」を指す。アルコール・アノニマス（AA）を端緒としたこの運動の特徴は、体験や苦悩を語り合い、参加者間で相互共有することである。そのとき「AA流の神学は、一つの祈りを備えている。セレニティ・プレイヤー（平安の祈り）と称され、……この祈りを用いて、嗜癖者は直面するパラドクスを一つひとつ選択肢に変えながら人生を進むことができる」。そして「参加者たちは、この関係性を通し

て自らの自らに対する関係を修正し、「あるがまま」の自己を、その悩みやパラドクスを含めて受け入れるようになる」ことが〈問題解決〉すなわち救済であると述べられている（斎藤1998）。

この解説をふまえると、セルフヘルプ運動で〈ニーバーの祈り〉の果たしている役割が見えてくる。そこではこの祈りが参加者個々人の〈自己過程〉の指針として機能している。「変えることのできないものを受け入れる冷静さ」として、悩み傷ついている自分自身を受容する。けれども同時に「変えられるものを変える勇気」によって、自己の問題を是正していく。ひいては「変えられるものと変えられないものを識別する知恵」を通して、〈問題性を抱えた自己〉と〈その克服を志す自己〉とをより高次で統合していくのである。

但し、これらの〈自己過程〉を導く「神」は、繰り返しになるが、「グループの中に姿を現す愛」すなわち悩みや葛藤の共有による連帯と共感の意識である。宗教学者の島蘭進氏は「このスピリチュアリティは伝統的な宗教とは異なり、個人の自由を尊ぶ形をとるにしても、自己を超えた大いなるものとのつながりの中に自らを置こうとするという点では、広い意味での宗教の範疇に十分に収まる」（島蘭2007）と述べ、この運動を「新霊性文化」の一つとして位置づける。

果たしてこの運動が、既存宗教に比して個人の自由を尊重すると判断できるかどうか。むしろ人格神と人間との関係性の喪失は、自由とその意味を変質させるのではないかと、筆者はキリスト教神学の観点から疑問を呈さざるを得ない。いずれにしる、この運動における〈ニーバーの祈り〉使用は宗教性の変容を伴っている。

4. むすびに代えて

研究ノートとしての拙論は暫定性を免れ得ないが、以上の論述から浮上する研究課題について述べておきたい。

日本においてこの祈りは、時に原作者がニー

バーであることさえ意識されないままに、広範に普及してきた。その中から、典型的な二つの受容の型を論じた。それらについて否定的あるいは肯定的いずれの評価を下すにせよ、両者の示す宗教性は〈神観念〉〈人間観〉〈救済理解〉そして〈神一人関係〉といった根本的要素からして著しく異なっている。そして、同一の祈りが、受容形態によってこれだけの宗教性の相違を生じさせる。その事実は、「日本におけるキリスト教の〈受容〉と〈変容〉」という、筆者にとっても本大学にとっても重要な研究課題について、〈ニーバーの祈りの受容〉を鍵として分析する可能性を拓いていると思うのである。

参考文献

- Reinhold Niebuhr, *The Children of Light and The Children of Darkness*, New York 1944. (『光の子と闇の子』武田清子訳、聖学院大学出版会、1994年。)
- 大木英夫『終末論的考察』中央公論社、1970年。
- 斎藤学『魂の家族を求めて』小学館文庫、1998年。
- 島菌進『スピリチュアリティの興隆』岩波書店、2007年。
- 高橋義文「ニーバーの『冷静を求める祈り』—その歴史・作者・文言をめぐって—」(チャールズ・C・ブラウン『ニーバーとその時代』高橋義文訳、聖学院大学出版会、所収) 2004年。
- 日野原重明『病むこととみとること』日本基督教団出版局、1991年。
- 渡辺和子『心に愛がなければ』PHP文庫、1992年。

(まつもと・しゅう 聖学院大学総合研究所助教)

聖学院大学出版会

ラインホルド・ニーバーの著作



新刊『ソーシャルワークを支える宗教の視点』
高橋義文・西川淑子訳 2,100円

経済不況による凄まじい格差社会が到来していた1930年代のアメリカを背景に社会の公正を実現するためのあるべき社会福祉の姿を提示。

『光の子と闇の子—デモクラシーの批判と擁護—』
武田清子訳 2,243円

正義と自由を確立するためにはいかなる指導原理が存在するのか。キリスト教思想に基づくデモクラシー原理の正当性を弁護する。

『アメリカ史のアイロニー』

大木英夫・深井智朗訳 ¥3,990

アメリカは20世紀半ば、国民的経験も精神的準備も無いまま世界史的勢力として躍り出た。この大国はどこへ向かうべきか。自己認識と責任意識へと導こうとするアメリカ論。

『ニーバーとその時代—ラインホルド・ニーバーの預言者的役割とその遺産—』

チャールズ・C・ブラウン著/高橋義文訳
¥6,300

ニーバーの生きた時代・社会との関連を明かにするニーバーの伝記。

お求めは 全国の書店で注文できます。
amazon.co.jp で購入することもできます。

聖学院大学出版会

〒362-8585上尾市戸崎1-1 TEL : 048-725-9801

E-mail : press@seigakuin-univ.ac.jp